

母の諫言

加藤 一和

私は小学校五年生でした。その年の最後の農作業であった大根と白菜の収穫を終え、リヤカーに積載し家路に着きました。山峡における晩秋の落日は忙しく、山の端には大きな冴え冴えとした月が登り始め、母と私の細く長い影法師は、月明りに照らされた山路を、道端の虫の音に急かされていきました。

ふと母が、「一和よ、おまえは一体将来何に成りたいのか」と唐突に尋ねました。五年生という年端では、行く末など考えてもいなく、母の問いに狼狽していると、「人生とはね、細く長く生きていかなければならないものだよ……」と、それは寂しげに、まるで自分に言い聞かせているよう

な呟きでした。時代に任せ、戦前・戦中と暗鬱なる年を重ねてきた母の崩れ落ちそうな細い肩と、枯枝のように折れてしまっそうなモンペの後姿とが、脳裏に焼き付いています。「細く長く生きる……」とは、母の人生そのものを私に語りかけていたのか、はたまた私の人となりの生き方を教示しようとしているのか、宿命的な諦観を感じました。当時の教育も、世間の風潮も、「立身出世をし故郷に錦を飾るものだ……」というようなことが、当たり前のように語られていた時代であったように記憶しております。

私は県南のM町に、三人兄弟の長男として生を受けました。家は、曾祖父の代には町内でも三本指に数えられる茶屋を営んでいたと聞きおよんでおり、一人娘であった祖母は、当時としては稀な女学生としての教育も受け、蝶よ花よと育てられたそうです。

しかしいかんせん、曾祖父は兄弟の連帯保証人としての責務から零落の一途を辿り、離散と貧困

るっば
の埧場に落ちてしまい、おまけに曾祖父と婿養子
であつた祖父とは折り合いが悪く、父は孫であり
ながら曾祖父母の面倒をみるという宿命を負うは
めになりました。曾祖母は先の曾祖母の若死によ
り、後妻の人でした。それゆえに母は嫁と姑とい
う以上の確執に苦しみ、幼かつた私達兄弟の心
も深い傷跡を残しました。

祖父母の面倒は、父の弟が隣り町で、零細な農
業を営みながらも見ることになり、祖父は道楽的
な面持ちでささやかな糧を得、祖母は豆腐、油揚
げ、納豆等を造り行商をしておりました。それは
「有る時払いの催促無し」というようなお嬢様の
素人商売で、商売というより貧しい人々に対する
救済のようであり、自ら貧困に貧困を重ねる生活
をしていたそうです。

父もまた零細農家でした。住居は町中に置き田
畑は郊外にある通い農業で、徒歩で片道一時間も
かかるというものでした。当時は自動車などは夢
物語の世界で、リヤカーに農具、肥料、食糧など
を積み込み、朝は日の出前に出かけ、帰りは月明
り星明りを頼りに家路を急ぐのでした。通い農業

になつた原因は、没落した曾祖父が公用地の払下
げ原野を開墾し、完成した田畑を売却するという
ような生業なりわいをしていたためで、条件が良く高く売
れる田畑は売却し、僻地や条件の悪い売れ残つた
所を自家用として耕作していたためです。

母は、母方の祖母の若死により、長女として三
人の弟・妹の面倒を見、義理の母の連れ子と異腹
の弟達の世話までもしななければならないという複
雑な家庭環境で、葛藤の日々を送ってきました。
これこそが母をして「細く長く生きる……」と言

わしめた理由であつたのでしょうか。白粉おしろいも付け
ず紅も差さず、歌わず旅行もせず、そのような母
の生き方が、私の人生に見果てぬ夢を重ねたので
しょうか。あるいは元々病弱体質であつた私への

戒めいましか、それとも行く末のサラリーマン人生への
教訓としたものであつたのか。職場における人間
関係や、理不尽な顧客との軋轢等に辞表をしたた
めたことも幾多かあり、そのようなときには母の
諫言が脳裏をよぎり、苦境を堪え忍んだものでし

た。

遠く西のあなたに雪を残した焼石連峰を望み、春の田起しから秋の稲刈りなど、幼き時代の農作業の思い出とともに、秋の夕暮れの母と私の細く長い影法師が、追いつ追われつ、重なっては離れ、

離れては重なり、走馬灯のように懐なつかしく、また

悲しげに駆け巡るのでした。

今、高齢者施設に横たわる母は、どのような夢を追っているのでしょうか。大正女の「細く長く生きる……」という、先の少なくなった実践の途上で……。

生きる

加藤 一和

一昔前の話である。日本と韓国との共同開催であったワールドカップの開会式を、小さな缶ビー

ル一本を片手にテレビ観戦していた時であった。

突然、表現の仕様のない不快感に襲われた。少し

時間を置き、みぞおち鳩尾の奥から下腹部にかけて重苦し

い鈍痛が、さざなみ細波のように押し寄せてきた。時折逆

巻く波頭が砕け散るように襲いかかる激痛。腹ばいになったり、俯したり腰を持ち上げたり、エビ

のようにまるこまったりと、七転八倒の修羅の時を経て、脂汗と涙と悪寒の中で眠りに落ちていた。

また始まったか!! 決勝戦の日であった。勝敗などほとんど記憶から抜落ちていた。開催日と同様、缶ビール一本の魔力で眠りに落ちていた。ふと目覚めると、前日の苦痛を呼び起すような悪い予感が脳裏をかすめた。私はカタカタと歯を鳴らし、寝汗にまみれて震えていた。

時計は午前一時三十分を少し過ぎていた。窓の外は台風崩れの風雨で、街路樹が悲鳴をあげていた。あの日以来、病状が表れない事を良いことにして放置していたツケがまわってきたのである。とりあえず暴風雨の中に車を走らせた。道は我が

専有路みたいにも他車は無く、フロントにたたきつける雨と、視界を求めるワイパーとが、攻めぎあっていた。「落ち着いて走るのだ!!」と焦る自分に言い聞かせ、滲む街灯を頼りに中央病院に急いだ。

緊急受付には、二、三人の先着患者がいたように思われた。緊急外来の窓口でありながら、長時間待たされている事に焦りと戸惑いを感じていた矢先、救急車で搬送されてきた患者がいるとその患者が優先され、自ら駆け込んだ者の病状の重軽は無視されるといふ現実に、臍を噛締め苦痛に喘ぎながら順番を待つしかなかった。

夜勤の医師は研修医なのか、若い男女三名の医師であった。その若さに不安を感じつつも、問診、採血、レントゲンと進み、結果がでるまで緊急患者用のベットで待機となった。尿管結石の疑い有りとのこと。たぶんこれは誤診だ。以前、尿管結石を患ったことがあったので、今般の病状は何かもっと恐ろしい病気のように思われたが、それを口にすることができず、痛み止めの処置を受け専門医の診断を待つこととなった。

結果として即入院となり、三か月間もの闘病生活に入った。病名は「総胆管腫瘍」というもので、胆嚢にできた胆石が胆管を下り、十二指腸への出口近くの膵臓の中を通る胆管に引っ掛かり、炎症を生じ近辺組織が癌化したものであった。

人間ドックでは、再三胆石が有るといふ指摘はなされていたが、経過観察ということで放置されてきたものであった。最近のドックも当年の三月に受診し、特に問題が無いという結果報告が届いたばかりであった。今まで行なってきたドック受診は何んだったのか、いきどお憤りと不信を持ってしまった。

手術に向け、数回にわたる内視鏡検査、CTや血液検査等、手術の手順確認や余病有無の確認がなされた。一回の検査に対し、およそ一週間の絶食と栄養剤点滴による体力回復の繰返しであった。手術の内容は、胆嚢と膵臓の一部と十二指腸摘出という大掛りな手術であった。

この病例は、月に二、三名の患者が有り、手術の担当医はすでに百二十名以上の手術実績のある名医であり、なんら心配する必要が無いという説

明を受けた。とはいえ「癌」と言う病名を宣告された時、頭の中が真っ白になり、心取り乱したことは実事であった。生への執着、未練が無かったといったら、嘘になる。

妻が私に先立つこと十数年前に、甲状腺癌の手術を受けている。当初聞きおよんでいた手術時間が、大巾に超過した時の不安。その不安に比べると、私の手術や死に対するそれは軽いものであった。子供達もある程度大きくなり、妻の生活基盤も最低限は保証されていたからかもしれない。

なぜか同時期に、知人が次々と癌に倒れた。そして六年後には、二度目の癌になり胃を摘出した。種々の後遺症を抱えながらも生きていく。「人間が笑うことが出来るのは、死を忘れていくからだ。死の際まで死を思わないで生きていくことは、人間の生き方のもっとも健全なものにちがいない」(上田三四二の「この世この生」との一節を思い出した。二度も死を覚悟した私にとって、健全な生き方ができないのであろうか。笑わなくてもいい。死をみつめ生きることこそ、優しい生き方ができるのではないだろうか。私はそう思って、生を全うすることとした。

「旅に病み 夢は枯野をかけめぐる」
芭蕉